

婚約破棄から始まる
バラ色の異世界生活を謳歌します。

CHARACTER

ペルセウス ・ギルノア

ギルノア王国の国王。
アスカの実力を高く買っている。

イスメラルダ

ギルノア王国の聖女。
物腰が柔らかく、穏やか。アスカの親友。

マリアンヌ

フリオニールに取り入り、
贅沢な生活を送る。
自分勝手に残酷な一面を持つ。

フリオニール ・ギルノア

ギルノア王国の第一王子。
黙ってれば美男子だが、
いろいろと残念な性格。

ゼクス

ギルノア王国の第八王子。
獣人族の血を引いており、
狼の耳と尻尾を持つ。
聡明で責任感が強い。

シルバ

偶然アスカが助けた
プラチナウルフ。
アスカのことが大好き。

アスカ

柊外れの魔力を持つ元侯爵令嬢。
実は前世の記憶がある転生者。
フリオニール王子に婚約破棄されるが
新たに国王より辺境地を賜り、
自由気ままに冒険者生活を楽しむ。

プロローグ 婚約破棄って甘美な響きですよ

「アスカ。私は真実の愛を見つけた。悪いが君との婚約は解消させてもらう」

フリオニール王太子は私こと、アスカ・キサラギに高らかに宣言した。

今日は私の社交界デビューの日だ。この国で十五歳になる貴族子女が集まり、盛大に開かれるダンスパーティーの会場での事だった。

王家の主催で毎年行われるこのパーティーは、この国の主^{おも}だった貴族家に参加している。

その場の空気は凍り付いたが、王太子であり私の婚約者でもあったフリオニール様は気付いていない。彼に腕を絡ませている、やたらとお胸の大きな子爵家令嬢のマリアンヌと見つめあいながら言葉が続ける。

マリアンヌは学院の同じクラスであったが、決して成績の良い子ではない。

むしろアホの子と言ってもいいだろう。

全ての栄養はお胸に偏り、興味があるのはドレスや宝石、お化粧ばかりという、典型的な贅沢貴族のお嬢様だった。

そしてそんな生活を続けるために、一番お金を持っていそうな王太子に狙いを定め、籠絡に成功したのだろう。

ナイスジョブだよ！ マリアンヌ。

「アスカに落ち度があったのではない。ただ私が若すぎて、愛というものを、わかっていなかったのだ。十分な補償はさせてもらう。どうか私の真実の愛を快く応援してほしい」

私の父、キサラギ侯爵はその言葉を聞いて、その場にへたり込んでしまった。

国王陛下も親同士で決めた婚約を、こんな席で解消だと宣言されて頭を抱えている。

陛下は唯一私の本当の力を知る人だったからね。

私が約束通りに王太子様と婚姻すれば、実家のキサラギ家は公爵へと陞爵する事も決まっていた。

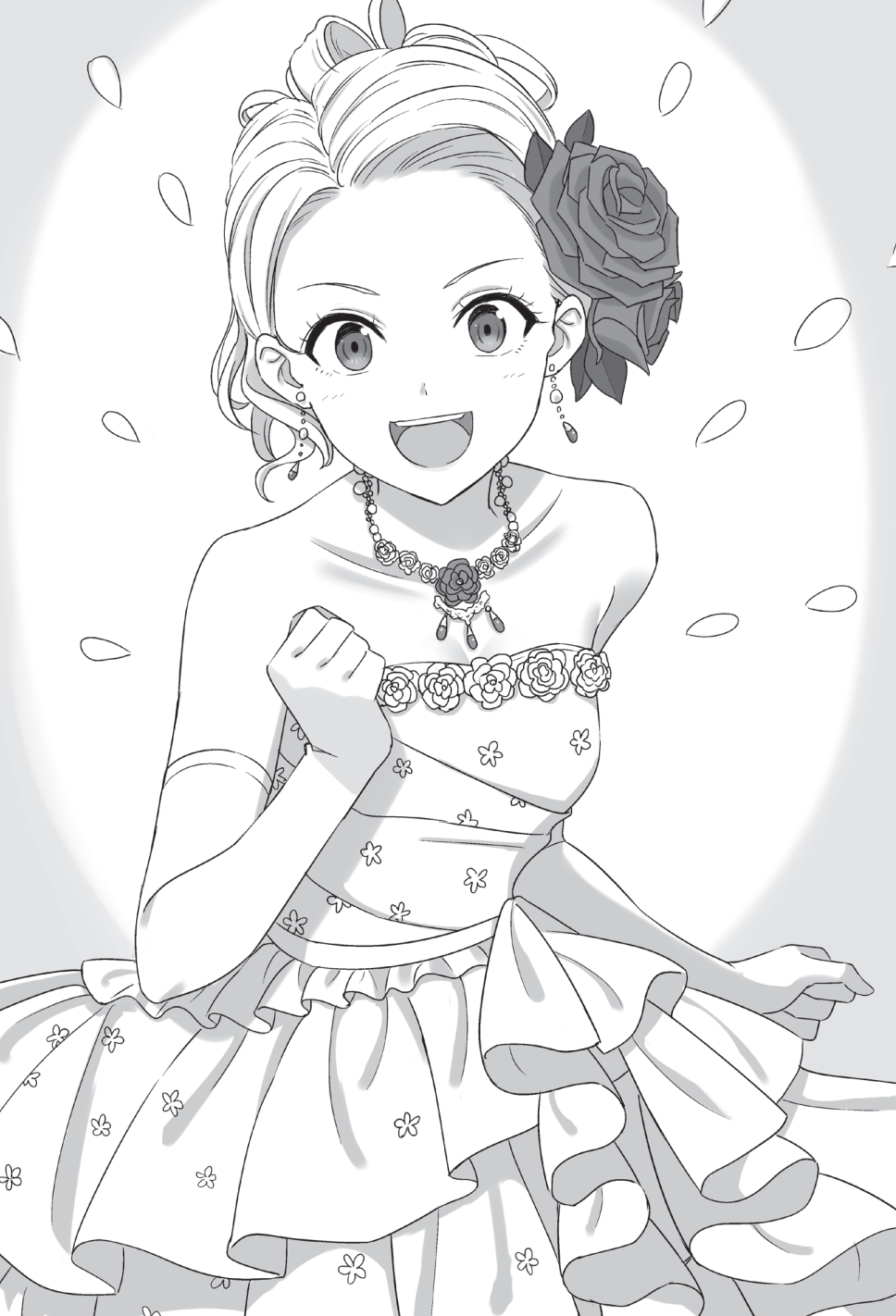
婚約の話がなくなった以上、王家の縁戚関係のみ叙爵される公爵家への話は当然立ち消えだろう。

私は婚姻前に決まって良かったと思ったが、お父様たちはそうは、いかないらしい。

「フリオニール様。畏まりました。どうぞお幸せに！」

しかし私はそう言って、涙を拭くふりしながら王太子に背を向けて、足早に会場を後にした。

廊下に出て周りに誰も居ない事を確認すると、満面の笑みを浮かべて「ビバ！ 異世界!!」と叫んじゃったよ。





翌朝、私は王宮へ呼び出された。

父は昨日のショックで寝込んでしまっているため、代わりに私の異母兄であるアンドリュウ兄様が、私と一緒に王宮へと向かう。

「アスカ、お前は王太子様に何をしたんだ？」

「え？ 別に何もありませんよ？ マリアンヌがフリオニール様の言う事を何でも素直に聞いてあげたから、気持ちに移ったのでは？」

「まじか？」

「ええ」

「まあ、心変わりには仕方ないが、貴族は見栄で生きている。わがキサラギ家が理由はどうあれ、社交界で笑いのにされた事実は消えない。恐らく今回の件でお父様は隠居され、家は私が継ぐ。そしてアスカには家を出てもらう」

「承知しております。昨晚、王太子様に補償はするとの言葉もいただきました。私はこの先キサラギ家からも離れ、一人で生きていこうと思います。親不孝な娘で申し訳なかったと、お父様にお伝えください」

「おい、アスカ。まさかこのまま家に戻らぬつもりか？」

「はい。私は居なかった者としてお扱いください。陰ながらキサラギ家のご発展をお祈り申し上げますわ」

兄と私は謁見の間に呼ばれて中へと入った。

その場には王太子と執事の二人だけが出て、執事が慰謝料の目録を読み王太子からは一言もなく終わった。

キサラギ家に対して一千万ゴル、私アスカに対して五百万ゴルとだけ記された紙切れで、帰りに国庫で受け取るように告げられた。（この世界でのゴルという通貨の単位は、現代の日本円と、ほぼ同じ価値だよ）

「それではアンドリュウ兄様。ごきげんよう」

私は貴族家の娘として、最後にこれ以上ないと思えるほどに綺麗なカーテシーを捧げ、馬車にも乗らず、アンドリュウ兄様と逆方向へと歩みを進めた。

三分ほど歩くと、王宮の門を守る衛兵の姿も見えなくなる。

その先に造りは良いが派手さはない、一台の黒塗りの馬車が停まっていた。目を向けると手だけが見え、私を招き寄せているのがわかる。

「まあしょうがないか」と、呟いて馬車へと近寄る。

その中にはこの国の国王陛下、ペルセウス・ギルノア様の姿があった。

「アスカ。すまん。我が息子ながら、あそこまでアホとは思っていなかった」

「国王陛下。王太子様は次代の国王になられるお方です。きっと深いお考えがあったのでしょうか」
「アスカはどうするのだ。家を出るのであろう？ まさかこの国からも出て行くのか」
「国王陛下。そこは少しご相談が……」

第一章 婚約破棄をされるまで

私は一歳の誕生日を迎えた日に全てを思い出した。
ちよつと長くなるけど、私のこれまでの、お話をするね。
とてもブラックな企業で働く二十六歳の社会人だった私は、連日の徹夜勤務で疲労度マックスになり、帰宅途中の地下鉄の駅で階段を踏み外し、あっけなく人生を終えた。
そして転生し、記憶が戻った私の現在の環境は……
貴族家三女。それも侯爵家だから悪くない。
この世界には魔法が存在した。
ラノベ大好きだった私は、そりゃ喜んだよ。
憧れの魔法少女になれる可能性大だからね。
どうせ異世界転生するなら、女神様から、チートな能力の一つや二つはもらいたかったな。
でも私には前世の記憶という、とてつもないチート能力があった。
一歳で前世の記憶を取り戻した私は、まずこの世界の言語を必死で学んで本が読める程度になろうと思った。

日本語のように、いろいろな文字の種類がある訳じゃないしね。

ただ、一歳の子供が屋敷の中といえども勝手に歩き回って書庫の本で学ぶのは不自然なので、協力者は必要だった。

私は屋敷の中の人間関係を冷静に見極めた。

父である侯爵様は、自分の領地にはほとんどいらつしやらず、王都でお仕事をしている。

このお屋敷には父の三人の夫人と、その子供たちが暮らしているが、三人の夫人にはそれぞれ別棟となった屋敷があてがわれ、渡り廊下で本邸と繋がる構造になっていた。

第一夫人には一男一女。

第二夫人には二男一女。

そして第三夫人である私の母には一女（私）だけという家族構成だった。

第一夫人と第二夫人の義母様は他領の貴族家からの輿入れだったけど、私の母親は侯爵家寄子の男爵家から行儀見習いでおとずれていた時に、侯爵様に見初められ、できちゃった婚をしたんだって。母は他の使用人たちと比べても若い。

一応貴族家の娘だから、露骨にいじめられはしないけど、他の二人の夫人から見れば、使用人が色目を使って割り込んだと思っっているだろう。

屋敷内でも母の味方は、母と同じ年の侍女で領内の寄子の準男爵家から奉公に来ているサリアという人だけだ。

私はこのサリアと仲良くしようと決めた。

ようやく一歳になったばかりの私は、サリアに話しかける。

「しやりあしやん、あしゆか、じを、よめるようになりたいの」

一歳になったばかりの女の子に話しかけられ、ちよっと吃驚したようだけど、サリアは私にこの国の文字を教えてくれた。

わずか一か月ほどで、この国の文字を覚えた私にサリアは「アス力様は、本物の天才でございます。奥様や旦那様にお伝えして、しかるべき教育を受けられるように私から申し出ましょう」と言ってくれた。

前世で、一流と言われるほどではなかったけど国立の大学を現役で合格、卒業した私にとっては、さほど難しくはなかったよ。

「しやりあしやん、わたしが、じがよめたり、しゅこし、おべんきようができるのは、まだないしよにしているほしいの。いまはまだ、ないしよで、いつぱい、おべんきようしたいの」

「内緒でございますか？」

「うん！」

そう答えて満面の笑みを見せると、サリアは……簡単に落ちた。

それからはサリアに頼み、お屋敷の書庫から次々に本を持ってこさせて私は本を読みあさった。

この世界では六歳の洗礼の儀式で魔力の有無と適性を告げられ、そのお告げに沿って人生が決まるらしかった。

まず、魔力があるのは全国民の十パーセント程度なんだって。

そして使える魔法の属性だけど、四つの基本属性、火、水、風、土が存在し、魔力があれば各二十パー

セントずつの確率で、この四属性のいずれかの適性が現れる。

残りの二十パーセントの中で、聖属性が十パーセント、その他希少属性の光属性や闇属性などが十パーセントで現れ、聖属性であれば、聖職者や聖騎士としての輝かしい未来が待っているんだって。そして魔法適性のある人の中でも二つの属性を使える人は十パーセント。

三つの属性なら更に十パーセントと十分の一の希少さになるんだって。

属性が三つも使えれば騎士としても冒険者としても、一流の未来が待っている。

この洗礼は六歳まで受けられないから、現時点で私に適性があるのかどうかはわからない。

もし適性があっても魔力量が大事で、少ないと魔法が発動できない人もいるんだって。

鍛えれば少しは増えるそうだけど、お告げ以降に大幅に増える人は少ないらしい。

このあたりがこの世界での魔法の基礎知識だよ。

そのほかにもサリアに持つてきてもらった本で、この世界の基礎知識は学んだけど、大して役に立ちそうな知識はなかったんだよね。

でも！ 私には前世で手に入れた豊富なラノベ知識が存在する。

その中にはきつと見つかるはずだ。

自力で身に付けるチートが！

六歳の洗礼を受けるまでが勝負だよね！！

私が最初に考えたのは、魔法が使える世界なら必ず体内に魔力を生み出す器官か、空気中に存在する魔素を取り込むための器官が存在するはずという事だ。

そう思って自分の身体の中に魔力を感じる部分を探した。

一週間程頑張ってみたけど何もわからなかった。

だけど……私は魔法使えない人なのかな？ せっかく異世界に来たのに悔しいい！ と思い始めた頃だった。

お丸に座って、おつきな方を頑張って出していた。

その日は、するつとは出てくれなくて、下腹の辺りに手を当てて、押さえるような感じで一気に力んだの。

ちよつときちゃんい話でゴメンネ……

その時、手を当てた下腹部分にほんの少しだけ、他の部分と温度差があったように感じた。

「まさか？ ここのの？」

おへその下あたりで、表面ではない五センチメートルほど奥の辺り。

意識を集中してみる。

ある。

確かに何か違う物を感じる。

「やったあああああ！」

私はトイレでパンツを下ろしたまま、大声で叫んだ。

サリアが慌てて駆け込んで来て「アスカ様どうなさいましたか？」と声を掛けてきた。

ちよつと恥ずかしくなったけど「あのね、おつきなう〇ちがでで、うれしかったの」と伝えた。

一歳ちよつとの子供が出すには大きすぎる物体を確認しながら、サリアが「アスカ様おめでとございます」と言いながら、お尻を拭いてくれた。

魔力を感じられれば次の段階だ。

ここもラノベ知識が役に立つ。

私は下腹部に感じた魔力を意識して、体全体に移動させようと必死で練習した。

まず魔力があつた場所だけど、これは前世の記憶では丹田たんでんと呼ばれている部分だつたと思う。

この丹田たんでんを起点にして、胸、右腕、頭、左腕、腰、左足、股、右足と魔力を動かし、また丹田たんでんへと戻す。

慣れてきたら、徐々に速度を上げていく。

さらに慣れてきたところで、任意の場所に瞬間的に移動させる。

これを三か月ほどずつと行っていた。

魔力を身体の中に通すと、頭も体もすごいスツキリして気持ちがいいのもわかった。

次の段階は魔力を消費する方法だ。

体内の魔力を消費しきつてしまえば、次に作られる魔力はもっと大きな魔力になるはず。

私がラノベで培った知識ちかは教えてくれる。

「でも、私ってまだ魔法使えないから、消費の仕方がよくわかんないな？」

一生懸命に「火よつけ」「ファイア」「着火」「古の約定により火の聖霊よ顕現し、この世界を燃やし尽くせヘルバーニング！」などと唱えてみたが、何一つ現象は起こらなかった。

「ねえ、しやりあしちゃん。しやりあしちゃんは、まほうはちゅかえるの？」

「アスカお嬢様。私は洗礼の儀では聖魔法の適性があると告げられましたのよ」

少しドヤ顔だった。

「しやりあしちゃんしゅごい！ちゅかつてみせて」

「それが……私は魔力量が少ないというか、聖魔法を発動できるだけの魔力を持っていなかったの
で、使えないらしいのです。それで就職もできずにこのお屋敷で行儀見習いをさせていただきましたな
がら、嫁ぎ先を探しているのでございます」

うん……サリアの残念キャラにとっても似合う境遇で安心したよ。

「まほうのちゅかいかったって、どうしゅるの？」

サリアは、お箸のような棒を取り出して私に言った。

「こういった杖と呼ばれる発動媒体を通して顕現させるのが普通でございます。私もまだ諦めきれ
なくて、毎日時間がある時は杖に魔力を流しています。まだ発動はした事がないのです」

サリアの話を聞いて私なりに考えてみた。

とりあえず杖に魔力を通せば体内から外には出るんだから、魔力は消費できるかな？

あれ？もしかしてサリアに私の魔力を流したら、サリアが魔法使えるようになったりする
かも？

そう思ってサリアに話しかけた。

「しやりあしちゃん。あしゅかにちゅえにぎらしえて？それではんたいがわを、しやりあしちゃん

にぎって」

言われた通りにしたサリアに、私はいつものようにゆっくりと体内の魔力を動かし、杖を通じて全ての魔力を彼女に送ってみた。

すると急な眩暈に襲われ、私はその場に倒れた。

「しやりあしやん、ヒーリュをちゅかってみて……」

薄れゆく意識の中でサリアにそう伝える。

サリアは「お嬢様ああ」と叫びながら動揺していたが、「ヒール」と唱えた瞬間、杖の先からヒールが柔らかな光と共に発動した。

そのヒールのお陰でかろうじて私は意識を取り戻した。

ただし、魔力がない状態だから眩暈がする。

あれ？ 魔力がないと眩暈がするって事は、もしかしてこの世界の人ってみんな魔力はあるのかも？ そのまま倒れるようにベッドで眠りについた。

「ああああああ、私、今、ヒール使えちゃったよおお」

ちよつと騒がしめなサリアの声を子守唄代わりにしながら……

それから毎日お昼寝の前と、夜寝る前の時間は必ずサリアに杖を通じて魔力を流した。

慣れてくると杖も必要がなくなった。

普通にサリアと手を繋ぐだけで、自分の体内の魔力をサリアに送れるようになったよ。

そして私の魔力を受け取ったサリアは魔法が使えるようになっていた。

聖魔法であるヒールと浄化の魔法を使ってお屋敷内の家事を効率的にこなし、私と一緒に居る時間をたくさん作れるようになっていた。

サリアは魔法をえるようにはなつたのだけど、なぜかその事実を他の人には教えなかった。

「しやりあしやん。なんでまほうちゅかえるって、ほかのひとにおしえないの？」

「アス力様。私はアス力様に手を繋いでいただいた後でないと、あいかわらず魔法は使えないので、それではとても口外などできません」

確かにそうだよね……

でも私は毎日サリアに魔力を譲渡しながら、気になる事があつたんだよね。

サリアの体内できちんと魔力が一周していないっていうか、詰まっている感じがしたの。

今日はちゃんと原因を究明してみようと思って、サリアが部屋に來ると早速手を繋いでもらった。

「しやりあしやん、きょうは、りょうほうのおててちゅなぐの」

「わかりました。アス力様、これでよろしいですか？」

サリアが向かい合って、私の両手を軽く握る。

私はゆっくりとサリアの体内に魔力を流し始めた。

サリアの体内を感じるようにゆっくりと……

この頃には私の魔力の量は、最初にサリアと手を繋いだ時の十倍以上になっていた。ゆっくりと流し続けてサリアの全身を魔力で満たしても、私の魔力の半分程度しか使わない。

そして辿り着いた。

サリアの魔力が滞っている場所に。

サリアは決して魔力がなかったり少なかったりする訳じゃなくて、ただ回路が詰まっていただけだった。

丹田^{たんけん}から出ていく魔力が何らかの理由で詰まっていて、体内へ循環できていなかったんだ。

私は自分の魔力を使って、少しずつ少しずつ、サリアの丹田^{たんけん}の詰まっている部分を押し広げる。サリアの身体に私が流している魔力にプラスアルファした魔力が流れているのを感じる。

「しやりあしゅん。じょうかをちゅかつてみて。いっばいあせかいてるから」

「はい、浄化でございますね」

「いっかいだけでなくて、なんかいも、まりよくがなくなるまで、ちゅかつてみて」

「畏まりました。アスカ様」

むむつ、十回使えたね。

私の魔力の半分くらいと、サリアの自前の魔力で十回か。

さらに私の残り半分の魔力をサリアに流し込み、もう一度使えなくなるまで浄化を使わせてみた。今度は八回使えた。

ふむふむ。

「しやりあしゅん。もう、しやりあしゅんも、あしゅかとおててちゅながなくても、にかいは、じょうかが、ちゅかえるよ」

「え？ 本当でございますか？ なぜ急にそのような事が？」

「えとね。しやりあしゅんは、まりよくのでぐちが、ちゅまつたの。それをいま、かいちゅうしてあげたんだよ。まいにち、おへしよのしたのところにありゅ、まりよくをかんじるようにしたら、もつといるいろ、できりゅようになりゅかもね？」

こうして私は、他人の魔力回路を自分の魔力を通して見られるようになったんだよ。

それと同時に気付いたのは、魔力が枯^こ渇^{かつ}していると酷^{ひど}い倦怠^{けんたい}感を覚えること。そして魔力なしと言われた人は、恐らくみんな回路が何らかの理由で閉じてるだけだということ。

そうじゃないと空気のようには魔素が存在するこの世界で体が満足に動かせないはずだから。

次に私が興味を持ったのは、実際に魔法をどうやって使うかだ。

これは、洗礼を受けて適性を授からないと、使えないのかもしれない。

今の段階でも決して少なくない魔力量を私は持っている。

それなのに、魔術書に書いてある通り呪文を唱えても、全然魔法が発現できない。

サリアでさえ使えるのにな。

これはしょうがないのかな？ と思っていたある日、錬金術という本を目にとめた。

ページを開いて見る。

錬金術とは、錬金釜と呼ばれる魔道具を用いて、錬金釜に刻み込んだある魔法陣に魔力を流して行われる魔導錬成の事だと書いてあった。

魔法陣は現在では書ける人がいなくなった技術だとある。

現在存在する鍊金釜は、全て国が管理していて国のお抱え鍊金術師が魔法薬を調合したり、魔法金属を作り出したりする時に使用されているそうだ。

魔法陣なら、そのまま書き写せば同じ物ができるんじゃないの？

そう思ったけど、ただ書き写すだけでは発動しないらしい。

魔法陣を書く場所と、その文字が持つ意味に重要なポイントがあるらしくて、意図を込めながら刻み付けなければ、全く発動しないんだって。

現在残っている魔法陣は、ほとんどが鍊金釜に記されている物と、各街の教会の床に記されている、結界魔法陣と呼ばれる物しかないそうだ。

王都も含めて結界の魔法陣が記された床が存在したから、その場所に街ができたって記されていた。

ふむふむ。

そりやそうだよ、この世界には魔物や魔獣がいて、空を飛ぶ敵もいるんだから、結界がないと街なんて成立しないよね。

法律が書いてある本では、この国で一番重い罪は殺人よりも何よりも魔法陣の破壊だって書かれていた。

汚損しただけでも、極刑の対象になる。

破壊であれば、実行犯とその三親等以内の親族が全員死刑にされる。

たとえ貴族や王族であつても。

え？ それってもし王子が間違つて魔法陣を傷つけたら、王様でも死刑にされるって事なの？

万が一、王都の結界魔法陣が傷ついて機能しなくなれば、それこそ五十万人はいる王都の国民全てが魔物に襲われる危険がある。それを思えば、しょうがないのかもしれないけど……

この世界に存在する魔法陣に魔力を注げる人は、各国と教会によって厳しく管理されている。

鍊金釜を扱える鍊金術師は、もちろん国家資格だし、魔法陣に魔力を注ぐことができる人は、聖女様や聖人様と呼ばれる教会の偉い人だけだ。

洗礼の儀式で特別高い魔力を検出され、さらにそれから六年間を教会で修業を積み、人柄や性格に問題がないと判断された人だけが、魔法陣に魔力を注ぐ栄誉を与えられる。

地方都市では、魔力の高い女性が地方領主に嫁入りし、各街の守護を教会の聖職者と共に担^{にな}う事になる。

私は魔法陣に魔力を流せば、もっと簡単に魔力消費ができて、順調に魔力量を増やせるのになあ
と考えるようになっていた。

(魔法陣を見てみたいな)

サリアは自前の魔力だけでもお屋敷の掃除程度はこなせるようになっていた。

でも、手を繋いでみてもサリアの魔力量自体は増えていない気がする。

発動回数を重ねれば熟練度も増して、使用回数が増えるのかもあるのかもね？

「しゅあしゅあ。あしゅあ。まほうじんがみたいの。かきうつしたようなこほんってありゅの？」

「アスカ様。魔法陣の写本はございますけど、とっても高価な上に発動などではない物ですから、

魔法陣を研究する学者様たちくらいしか、お持ちになっていないんですよ？」

「しよれでもいいの。あしゅか、まほうじんがみたいの」

「私では手に入れる手段もないので、お母上にご相談されてみてはいかがでしょうか？」

「わかったの」

私はお母様に相談した。

お母様は、お父様と結婚される前はサリアと同僚だったので、私が本を読みたいという話はそれとなくサリアから聞き及んでいて、母の実家の男爵様経由で手に入れてくれた。

私の二歳のお誕生日に絵本と一緒に置いてあったの。

大喜びで魔法陣の写本を開いて見ると……噴いちゃったよ！

日本語でびつちりと発動効果、発動方法、発動威力、必要魔力が書き記されていたのだ。

修正や解除にはキーワードとして、クロスワードパズルの必要な要素が盛り込んであったけど、前世が日本人な私には、さほど難しくもない文字の羅列だったの。

そりゃあ、この世界の人に、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字、英数字を複雑に絡ませてある日本語文書を読めと言っても難しすぎるよね。

同じ言葉でも違う種類の文字で書いてあるし、わからないのも無理はないかな？

でも、私には普通に読めるし意味もわかる。

これって私、魔法陣書けちゃう？

それから、毎日魔法陣を書くのに夢中になった。

鍊金や結界などの難しい魔法陣は文字数も多くて大変だけど、属性魔法など、現在知られている

魔法は全て魔法陣に書き記して魔力さえ流せば、誰でも使えると知っちゃった。

どうやらこの世界は私にとってイージーゲームだと確定しちゃったね。

でも私はまだ二歳。

今は魔力を蓄えるために、毎日自前の魔法陣に魔力を流して頑張ってるよ！

身体強化や魔力強化も効果を魔法陣に書き記していくと、普通に使えるようになった。

難しいのは効果に対して必要な魔力量の計算くらいかな？

でもそれも実際に魔力を流して発動に成功すれば、試行回数を重ねて答えを導き出せるしね。

時間だけはたっぷりあるから楽勝だよ！



そんな感じで幼少期を過ごした私は六歳を迎えた。

三歳下の弟もできて、とても充実した毎日を送っている。

流石に弟は転生者ではなさそうだけど、私が魔力を流してみるとびっくりするほどの才能を秘め

ていることがわかった。

このまま成長すれば、兄様たちを押しつけて侯爵家を継げる立場になれる魔力量だと思う。

それはそれで心配だけだね。

彼が健康に育ってくれる事だけを考えよう。

今日は、私の洗礼の儀式が行われる日だ。

どの家庭もこの日だけは家族全員で集まって、洗礼の儀式で判明する能力に一喜一憂する。この国では当たり前前の光景なんだよ。

私の侯爵家では、すでに三人の兄と二人の姉が洗礼を受けている。

第二夫人の二人の兄は貴族家の男子として可もなく不可もなくの平均的な能力を授かっていた。それぞれ火属性と風属性に適性を持ち、将来は王国騎士になれるだろうってお父様も喜んでた。二人の姉もそれぞれ水属性と聖属性の才能に恵まれ、聖女候補になれるほどではないが、そこそこの魔力量を持ち、将来の縁談には困らないはずだ。

問題は、長兄のアレフだった。

幼少期から乱暴な上に勉強も嫌いだったアレフは、洗礼の儀式で何の才能も判明せず、魔力も微弱と告げられた。

こういう場合はひたすら剣術や体術を極めるべく頑張るしかないのだが、彼は努力という言葉が大嫌いで、毎日の鍛錬も全然まじめにやらず、お父様の付けてくださった剣術の師範も匙を投げる始末だった。

そしてさらにたちが悪い事に、性欲だけはとても旺盛で、何度も領内の平民の女の子を襲う事件を起こしていた。

流石にお父様もこのアレフに家を譲る判断はしないよね？

でも第一夫人のイザベラ義母様はアレフが家を継ぐものと信じてるよ。

どうなる侯爵家？

あ、私の洗礼の話のつもりがずいぶん脱線しちゃった。

ゴメンネ。

私の洗礼の儀式は、普通にやってしまうと絶対ヤバイとわかっていた。

だから、自分の前の順番の人よりちよつとだけ多い魔力を出そうと思ってたの。

私の前にいた公爵家の次女、イスメラルダ様の魔力を私はしっかりと確認させてもらった。

私から見たら微弱な量だけど、お姉様たちよりは多かったかな？

公爵家ご一行がとても嬉しそうに退出されている姿を見ながら、私も家族と一緒に洗礼の儀式の部屋へと入ったわ。

でも一応、私も侯爵家の娘として参加しているし、お父様に恥をかかせるほど少なかったら悪いかな？ と、イスメラルダ様よりちよつとだけ多めに魔力を出したの。

手抜きがばれないように、表情は一生懸命っぽくしたよ？

すると、その場に居た枢機卿様が「おお、素晴らしい」とため息の交さったような声を上げた。

「え？ どういう事」

「たった今、洗礼を終えられたイスメラルダ嬢はこの国での洗礼儀式で歴代最高の魔力を記録されたのです。その直後に、さらにその倍以上の魔力量を計測しております」

「え？ 測り間違いがあるかもしれません。もう一回お願いします」

「この水晶は、神から賜った宝具です。誤作動などはありません。正真正銘アスカ様はこの国の聖女としてふさわしいお方でございます」

ヤバイ……やばい……やらかしちゃったああああ……

あ、まだ適性を聞いてないな。

適性は何だったのかな？

「アスカ様の適性は無でございます」

「無？ ないって事ですか？」

「いえ、何物にも縛られない無限の可能性を秘めた属性でございます。過去に一人だけ記録されております。そのお方こそこの王国の建国の母、初代神聖女様その人でございます。教会から国王陛下にご推挙させていただき、神聖女の称号を名乗れるように取り計らいましょう」

「流石^{さすが}我が娘だ。この結果であれば国王陛下より王太子様の婚約相手としてお声が掛かるに違いない。わがキサラギ家も公爵家となる日が近いぞ」

お父様のその言葉に、私のお母様はとても喜んだけど、二人の義母^{かあ}様は私の利用価値を値踏みし、兄様姉様の表情はそれぞれ複雑な表情をしていた。

やりすぎは駄目絶対！ これ基本だったのに……

まだ六歳なのに教会へ閉じ込められちゃう人生なんて最悪だよ。

どうにかして逃げられないかな？

でも、私の願いは聞き届けられず、翌日から教会に預けられた。そして聖女となるための修業を

させられた。

いくら魔力の数値が高くとも、六歳はまだ子供だ。結界の魔法陣を傷つけてしまわないように、徹底した倫理観や礼儀作法などを叩き込む英才教育が始まった。

お父様は早速ロビー活動を行い、私は一つ年上の王太子、フリオニール様の婚約者となった。おかげで未来の王妃様としての教育も行われる事になったかった。

この状況はもしかして……私って自由を失っちゃってる？



それからさらに三年の月日が流れ、私は日々教会で聖女となるための勉強と、王妃教育としての礼儀作法を叩き込まれる生活を送っている。

私と同日に洗礼を受けた、公爵令嬢のイスメラルダ様も同じように教会へ預けられ、同じ教育を受けている。

元々私の存在がなければ、イスメラルダ様が未来の王妃として教育されていたはずだろうし、ちよっとだけ『ゴメンネ』って思う。

だけど、中途半端な爵位でなく王家以外では最高位となる公爵家出身のせい、ライバル意識をむき出しにされたり、意地悪をされたりという事もなく、本当の姉妹以上に仲良く教会での日々を過ごしていた。

もちろん一人の時間はあいかわらず魔力増幅に励み、魔法陣をどんどん書き出し、私の作ったマジックバッグの中にストックしている。

マジックバッグっていうのはダンジョンと呼ばれる魔物の巣窟でぐくまれにドロップされる、見た目よりも多くの物を収納できる便利な魔道具だ。

私が作ったマジックバッグは不自然さがないように、術式を書き込んだ魔法陣をポケットに張り付けているだけなので、とってもシンプルだよ。

私が魔法陣を読み解いたり書いたりできるのは、誰にも教えてないけどね。

サリアは気付いてるかもしれないけど……

そのサリアは、私が教会に預けられてしまったのでお役御免となり、侯爵領内の寄子^{よりこ}であったフリー男爵家へ興入れして、今年無事にお世継ぎとなる男の子を産んだとお手紙を貰った。

良かったね。

これまで第二夫人以降の縁談しか来なかったのが、聖魔法を使えるようになって、正妻として興入れできたとしても感謝されたよ。

一方私は、婚約者であるフリーオニール様とは週に一度教会に礼拝に来られる時に、一時間ほどのティータイムを過ごしている。

イスメラルダ様も第二夫人として彼への興入れが決まっていて、三人で一緒に過ごすようにしているんだけどね。

フリーオニール様は眉目秀麗であり、礼儀もきちんとされているように見えるのだけど、中身がな

いっていか、覇気を感じない。

会話も盛り上がり欠けるんだよね。

それでも婚約者だし、別に悪人ではないから『しょうがないのかな?』と思っている。



今日は私の三歳下の弟である、アランの洗礼の儀式の日だ。

久しぶりに家族が揃い、アランの洗礼を見守った。

アランの洗礼の結果は予想以上で、火、氷、聖の三属性の適性を告げられ、魔力量も少なくなる。しかも氷属性は、希少属性に分類され使い手がとても少ない。

将来は、騎士団長にもなれるほどの才能だろう。

「アスカお姉ちゃんに負けないように頑張るね!」

洗礼を終えて笑顔で私にそう話し掛けて来た。

もう可愛すぎて、萌え死にそうだよ!

でも……私の場合だと鑑定結果が良くて、公爵家へ^{しよんぐ}降爵の可能性を招き入れるけど、アランの場合は侯爵家の後継者争いで、三人の兄の存在を脅かしかねない。

第一夫人のイザベラ^{かあ}義母様と第二夫人のカーラ^{かあ}義母様のアランを見る目に闇を感じた……

翌年最悪な事態が起きた。

お母様と弟の乗った馬車が山賊に襲われ、二人とも殺されてしまったのだ。

お母様の実家へと避暑に出かける途中だった。

侯爵夫人であるお母様の帰郷なので、ちゃんと護衛の騎士もついていたにもかかわらずだ。

経験の浅い騎士だったとか、人里離れた場所だったとか、そんな理由はあつたけど、狙いすましたように私のお母様と才能豊かな弟アランを襲った山賊は、結局捕まらなかった。

葬儀のために実家に戻った私が見たのは、嬉しそうに葬儀を取り仕切るイザベラ義母様と、少し怯えたような表情のカーラ義母様の姿だった。

どちらかの差し金でこうなったのだろうけど、今はまだ証拠がない。

私は必ず真相を突き止めようと誓った。

お母様とアランの仇は必ず取るからね！

「アスカ、義母様とアランは残念だったな。アスカは気を落とさず、しっかりと聖女になるための修業を積み、このキサラギ家が公爵家へと陞爵されるように学ぶのだぞ」

にやけた表情で上辺だけの言葉を掛けて来る長兄アレフに虫唾が走った。

「アレフ兄様、キサラギ家が公爵家になったとしても、今のアレフ兄様のご評判では、お父様はアンドリュール兄様がアンジェロ兄様に家督をお譲りになるのでは？」

「馬鹿な事を言うなアスカ。家は長兄が継ぐ物だ。いくらアスカといえどもこの兄を怒らすとただでは済まぬぞ？」

「失礼いたしました。しかしお兄様、本当に長兄が継ぐのが決まっているのならば、アランと母様は亡くなりしなかったのでは？」

「何を言い出すのだ。俺は何も関係ないぞ。そんなくだらない事を考える暇があるのならば、せいぜい王太子に捨てられぬように、女らしく振舞う努力でもすれば良い」

アンドリュール兄様とアンジェロ兄様、二人の姉は、私のお母様と弟の死を本当に悲しんでいるように見えた。

お父様は今回の事件に関しては沈黙を貫いた。

お家騒動が明るみに出れば、公爵家への陞爵の話はなくなるだろうから、表立っては何も言えないのだろう。

今回の葬儀で本当に私の心情を察して温かい言葉を掛けてくれたのは、母の友人でもあったサリアだけだった。

「アスカ様。私はどんな事があろうともアスカ様の味方でございます。いつでも私を頼りになさってくださいませ」

「サリア、ありがとう。早速だけどもお願いしてもいい？」

「何でございましょうか？」

「胸を貸して」

人気がない場所で、サリアの胸に顔をうずめ、一時間ほど泣いた。

だってまだ十歳の女の子だから……

精神年齢は三十六歳だけどね……

サリアは私が泣いている間中、一言も発せず優しく頭をなでてくれた。

私は事件の真相を知るべく、他者の精神操作を行うための魔法陣魔法を作り上げた。対象者の心の中を覗く魔法だよ。

それを使い、やはり私のお母様と弟が襲撃されたのは、イザベラ義母様の指示によるものだった。

しかも事実の露見を防ぐために、実行犯はすでに全員が殺されていた。

私は自分の名前を出さずに、カーラ義母様に真実が伝わるように画策した。

カーラ義母様も、元は伯爵家の長女だ。

政治的な思惑はあるだろう。

何よりも今、一番危険なのは自分の二人の息子だと理解しているだろうから……

カーラ義母様の動きは迅速だった。

お家騒動として事を荒立てれば、家名にも傷がつく。

それではどう動けば良いのか？

カーラ義母様を選択した答えは、イザベラ義母様とアレフ兄様の暗殺だった。

ただ直接暗殺するだけであれば、イザベラ義母様と同じ穴の貉だ。

私はイザベラ義母様とその近くににいる人たちの秘密を探り、それを詳細に綴った『アスカファイ

ル』を作った。そのファイルをカーラ義母様へそつと渡したのだ。カーラ義母様はイザベラ義母様の側近と取引し、自分の味方へと寝返らせた。

その側近によって食事の中に混ぜ込まれた毒物は、徐々にイザベラ義母様とアレフ兄様を蝕み、

気付いた時には手遅れの状態だった。

全寮制の学園に通っていたイザベラ義母様の娘、イレーナ姉様は被害を免れたけど、イザベラ義

母様のお付きたちはキサラギ家から暇を与えられた。

これによりキサラギ侯爵家の体制は固まり、次兄であったアンドリュウ兄様が次代の当主となる

事が決定した。

お父様はカーラ義母様の動きを全て把握していたけど、何も言わなかった。

私はカーラ義母様に与えた情報と同じ情報を、お父様にも渡るようにしていたからね。

今回の顛末をどう考えているのだろうか？

貴族家とはこういう物なのかな？

仕掛けた私が言うのも変だけど、家族に対しての甘い感情を捨て去った十歳の冬だった。

◇ ◆ ◆ ◆

それから時は流れ、私は十二歳となった。

フリオニール様が嫌いではないが、恋愛感情を持ってない。

35 婚約破棄から始まるバラ色の異世界生活を謳歌します。

ただお世継ぎを産むための存在になる未来なの？

週に一度の三人でのティータイムはあいかわらず続いているのだが、フリーオニール様は私よりイスメラルダの方に興味があるようだ。

まあ、私から見てもイスメラルダは女の子らしくて素敵だもんね。

十二歳にしてすでに美しいっていう表現がぴったりだし、スタイルだって出るとこは出て、絞るところは絞れている。

それに比べると、凹凸の少ない私にあまり興味が向かないのもしやうがないかもね？

このまま「アスカとの婚約は破棄する」とか言ってくれないかなあ。

親同士の約束事はなかなか破棄も難しいだろうし望み薄かな……

せっかくの異世界転生、こんな人生で終わるのは嫌だよ。

十二歳になると聖女として結界に魔力を注ぐお役目を担_にう。

それと同時に、学院と呼ばれる専門課程を学ぶ学校に通う。

友達と言える存在はイスメラルダくらいしかいなかったから、「学院ではもう少しお友達を増やしたいよね」とよく話してた。

ずいぶん仲も良くなったから、お互い二人きりの時は呼び捨てなんだよ。

イスメラルダと私は毎日交代で結界に魔力を注ぐ。

六時間は一人きりになれる大事な時間だ。

本当に必要な時間はイスメラルダだと五時間くらいで、私だと十秒ほど。でもその事は誰にも伝

えてはいない。

決して覗かれない六時間は、私に完璧なアリバイを与えてくれるからね。

その大切な時間を使って教会を抜け出し、冒険者ギルドにこっそりと登録をした。

魔法陣魔法の転移で王都の外に一度出て「辺境の村から冒険者になるため、やって来ました」と門の衛兵に告げる。

普段はプラチナブロンドのロングヘアを腰のあたりまで伸ばしている私だけど、黒髪にしてポニーテールに纏め、瞳の色も普段の鸞_{もも}色から、黒色の瞳に変える。

これも魔法陣魔法で簡単にできるからね。

「街への通行料は三千ゴールド。ここでは仮の身分証を発行するが、冒険者ギルドで冒険者証を作ればそれが正式な身分証となる。一週間以内に手続きをしなければ、その仮身分証も使用できなくなるから、早めに登録を済ませろよ」

「はい。ご丁寧にありがとうございます。早速冒険者ギルドに向かいます」

門番の衛兵に伝えて冒険者ギルドを訪れた。

新規登録と書いてある受付に向かい、仮身分証を提示して冒険者登録をお願いする。

使える魔法と得意武器を聞かれたので、不自然じゃないように、水魔法と刀と告げて登録を済ませたよ。

十二歳ですでに属性魔法は全て使えるようになっていた。

私の六歳の洗礼で告げられた【無】という属性ははつきり言ってチートだ。

魔法陣魔法を使える私でないと、十分には使いこなせないだろうけどね。

一度、魔法陣を使って発動した魔法は、二回目から属性の制限を受けず、魔法陣を使用しなくても使えるようになるんだよ。

でも魔法陣を使って発動すれば、並列発動や重複発動ができるから、どう使うかは時と場合による！　って感じかな。

この世界の冒険者はFランクから始まって、E↓D↓C↓B↓A↓Sと昇級し、それ以降は特別な戦果をもたらした冒険者に、名誉称号としてSS↓SSS↓X↓Zというランクが用意してあるそうだ。でも、XやZは世界を災厄から救ったような英雄にしか贈られない称号らしいよ。

冒険者ギルドはこの国に所属しておらず、独立した組織なんだって。

戦争があった時には、基本的にどちらにも肩入れをしないで、中立を保つ。

でも傭兵ギルドもあって、そちらは戦争や内乱での戦が本業で冒険者と重複登録している人も多いらしい。

冒険者登録をした国以外での活動は、最低でもBランク以上の必要があるんだって。

受付のお姉さんが尋ねてきた。

「昇級試験に申し込めば、実力次第でCランクからのスタートも可能ですが、どうなさいますか？」
「昇級試験は望みません。ゆっくりとできる事を積み重ねていきたいと思っています」

「そうですか……魔物の討伐は常設依頼となっております。討伐認定部位の納品で依頼達成となり

ます。通常の昇級は、本人の希望とギルド職員の推薦の二通りですが、明らかに格上だとわかる状況でなければ、ギルドから推薦はございません」

「あの？　一応聞いておきたいんですけど、ランクが上がると得な事ってあるんですか？」

「ランクが一つ上がるごとに素材の買取価格に五パーセントが上乘せされますので、お金稼ぎが目的であれば、ランクは少しでも高い方が良いですよ？」

「結構大きいですね……」

「昇級試験を受けますか？」

「あ、はい。やっぱりお願いします」

「ギルドの訓練教官が相手をさせていただきます、実力に見合ったランクをお知らせします。この試験での最高ランクはCランクです。受験料が一万ゴル掛かりますが、構いませんか？」

「商売上手だよ……」

「訓練教官はどの程度のランクの方なんですか？」

「元Aランク冒険者のスタンフォードさんです」

ギルドの地下にある訓練場に連れて行かれて、そこで試験を受ける事になった。

「アスカは、刀と水魔法か。好きに使っていいぞ。この訓練場は場外に出れば、怪我が回復する。致命傷を負えば、外に転送されて全回復するぞ」

「はい。それではいきます」

一応身体強化は掛けておいたし、水魔法は使えるって言っているんだから、刀に纏わすくらいは

大丈夫だね？

私が水魔法を刀に纏わせて振ると、水がレーザー状に伸びて長さ三十メートルにわたる刃になる。この訓練場自体が五十メートル四方程度だったので、真ん中で振れば当然全体に刃が届く。刀を十回ほど振り回せば、最初は少し距離を取って立っていたスタンフォードさんの手や足が斬り離され、転がって外へと転送されていった。

「はあっ!？」

「あの……アスカさん？ 今のは一体」

スタンフォードさんが叫び、受付のお姉さん（キャサリンさんというらしい。名札があった）に聞かれて、困っちゃった……

「普通に水魔法を武器に纏わせて、斬っただけですけど？」

スタンフォードさんも、転送された場外から戻ってきた。

「いやあ、びっくりした。確かに油断していた俺も悪いが、魔獣に対してこの言い訳は通用しないな。俺の負けだ。文句なしのCランクスタートだ。キャサリン」

「了解しました。アスカさんはCランクスタートとなります」

「あのな。負け惜しみじゃないがな。今のは魔法剣という技術で、国宝指定されている剣を使わないとできない技なんだ。人目を気にせず披露しまうと面倒に巻き込まれるから気を付けろよ？ アスカ」

「あ……そうだったんですね。スミマセン、全然知らなくて。普通に斬るだけにします」

無事に冒険者となり、Cランク冒険者証を手に、教会の結界の間に転移で戻ってきた。

髪と目の色もちゃんと戻してるからね？

それから時間ぎりぎりまで時間を潰し外に出る。

魔力を注ぎ疲れた表情をする演技も忘れないよ？

それからは二日に一回、私が結界に魔力を注ぐ日は必ずC級冒険者アスカとして魔物を倒し、お小遣い稼ぎを頑張った。

十三歳になり、冒険者生活も一年を過ぎた頃に受付嬢のキャサリンさんから声が掛かった。

「アスカちゃんはBランクに上がりたいとかはないの？ 実績的には十分だけど？」

「だってBランクは国外の護衛の依頼をこなさないとけないでしょ？ 私にはその時間が取れないから無理なんです」

「そうだったの。残念だね。実際実力だけなら、この王都のSランクパーティと比べても遜色ないと思ってるんだけどね？」

「それはキャサリンさんの買い被りですよ。この辺りの魔物をチマチマ狩るのが精一杯ですから」
実際は結構な強さの魔物を退治してるけど大事になりそうだから言えないんだよね。

レッドドラゴンとか、オリハルコンゴレム、ヒュドラ、グリフォンにマンティコアなど単体で討伐Sランク指定の魔物も私のマジックバッグの容量を圧迫している。

最近は魔力量が青天井だから、これ以上入らないほどでもないけど。

買取カウンターで出したら大騒ぎになること間違いないから、そのうちどこか違う街の冒険者ギ

ルドで売ろうかな？

私が冒険者をして魔物や魔獣を狩るのは、魔道具を製作するための素材が欲しいからだ。錬金釜も遺物より、私書き込んだ最新の魔法陣の方が絶対に成功率も高くて高性能な魔道具や回復薬が作れるしね。

純ミスリルで作り、私が魔法陣を施した最新バージョンの錬金釜では、神話の秘薬と呼ばれるエリクサーでさえ調合できる。

もつと言えば結界魔法陣だって、私書きけば王都の十倍の広さの街でも守れるんだけどね。

しかも今の魔法陣みたいに魔力を注がなくても、乾電池のように魔力を貯めた魔石を魔法陣の中央に置いた釜に放り込むだけで勝手に維持してくれる。

放り込むだけでいいから聖女なんて必要ないんだよね。

でもなあ……こんなの発表しちゃったら、それこそ私の自由はなくなりそうだし、当分は秘密にしておこう。



十四歳のある日の事だった。

この日は、結界の当番はイスメラルダだったの。

私は、学院での授業を終えて教会でのんびりとしていた。

私たちの学院生活はそこそこ充実していて、それなりにお友達と呼べる人も何人かできたわ。

ボツチにならなくて良かったな。

それはさておき 閑話休題、イスメラルダが結界の間に入って五時間を過ぎた頃に結界の間から叫び声が聞こえた。

私は結界の間に駆けつけたわ。

そこには、イスメラルダとフリオニール様が転がっていた。

どうやら殿下がイスメラルダを無理やり襲おうとしたみたい。

イスメラルダは怪我をしていた。

でも問題は、そこじゃなかった。

いや……そこも問題だけど……

私は駆けつけていた司教様や枢機卿様の視線を気にせず、マジックバッグから回復薬を取り出してイスメラルダを治療した。

しかし……フリオニール様が転がっていたのは、魔法陣の上だった。

そして魔法陣は彼が腰に差していた剣によって傷つけられ、破損していたの。

私が見る限り、破損したのは発動には問題ない部分だけど、これ以上魔力を注いでも魔力を貯められない状態になっていた。

二十四時間後には、魔法陣の魔力は枯渇して結界は使えなくなる。

この事態が外に漏れてしまうとフリオニール様はもとより、国王陛下や王妃殿下、フリオニール様のご兄弟や、国王陛下のご兄弟に至る三親等までが処刑されてしまう。まさに国の崩壊の危機が

差し迫っていた。

すぐに王宮に使いが出され、国王陛下がご自分で馬に騎乗して駆けつけた。

結界の間に入って来るなり、国王陛下はフリオニール様を激しく拳で殴りつけた。

でもそんな事したっては何一つ事態は解決しない。

私は静かに国王陛下に申し出た。

「陛下以外の方を、お人払いしていただけますか？」

ほかに術もない国王陛下は私の申し出を受け入れた。

他の人が退出すると内側から結界の間に施錠を行った。

「国王陛下。私にはこの結界を修復する力があります。しかしそのためには私の持つ全ての魔力を使い果たさねばならず、今後聖女としての活動は継続不可能でしょう。一度魔力を使い果たせば、復活するかどうかともわかりません。幸いにも今この国にはイスメラルダという優れた聖女が存在いたしますので、私が力を使えずとも問題はございません。それでも構いませんか？ 聖女でなくなれば、当然王太子様の婚約者としてふさわしくありませんので、婚約も辞退させていただきます」

「アスカよ、その話は真か？ 神代の遺物であるこの広域大結界を本当に修復できると言うのか？ このペルセウス・ギルノア、神聖女アスカ様に一生の感謝を捧げる。どうか結界を修復し、この国をお救いください。そして願わくは、できの悪い息子なれど、フリオニールを夫としていただけますか」

あちゃあ……王様が目に涙浮かべて懇願してきてるのに『無理』とは言えないよ。

聖女を辞めて自由になる作戦、ちよつとミスっちゃったかな……

「国王陛下。どうぞお顔を上げてくださいませ。それでは早速結界の修復に入りますので、国王陛下も外でお待ちくださいませ」

あーあ、どうしようかな？

一番したかったのは婚約破棄だったんだけど、私から口に出しちゃうとお父様の立場的にまずいしなあ。

修復は三分もあれば簡単にできちゃうけど、あんまり簡単にするとありがたみがないから、一時間くらいは暇を潰さないと駄目だね。

でも、これで聖女はやらなくて済むから、もう少し冒険に時間は使えるよね。

あ、学院の女子寮って空きあるのかなあ？ 聖女じゃないのに教会にいたくない！

私は結界を修復して一時間後に疲れ果てた表情で外に出た。

私の魔力が枯渇したと証明するために、洗礼の儀式で使う水晶玉に思いっきり出力調整をして、通常の六歳児の半分程度の魔力を流し込み、聖女としては役に立てないとアピールしておいた。

こうして私は聖女の任務から逃げ出す事に成功した。

全てを押し付けられたにもかかわらず、イスメラルダは私にすごい感謝をしてくれて「私のせいで魔力を失わせてしまってごめんさい」と涙ながらに謝ってくる。

本当にええ娘やわあ。

フリオニール様に対しての処分なのだけど、結界に傷をつけた事実は発表できるはずもない重大事なので、即位するまでお小遣いが半額にされた以外はお咎めなしだった。

私は実家に魔力を失い、聖女でなくなつたと報告した。

お父様はそれより、王太子殿下の婚約者としての立場がどうなったのかが心配だったようだ。

しかしすぐに、国王直々に「婚約関係が損なわれる事はない」とお言葉を貰ったようで、それっきり私に連絡はしてこなかった。

一応、実の父なんだけど、ちよつと残念すぎる人だよね……

そして、聖女でなくなつた私は学院の女子寮に移り住み、他の同級生たちと同じように長期休暇を楽しめる立場になった。

ただ……魔力をなくした事になっている私は、それまでの魔法科特別クラスから、作法科へとクラスが変えられた。

こっちのクラスはお勉強も何もかもすごくレベルが低い。

唯一魔法科に勝つてゐる部分があるとするなら、お化粧のテクニクくらいかな？

この学校は全寮制なので、聖女だった私とイスメラルダ以外の生徒は学校の敷地内にある寮に住んでいる。

当然女子寮ではすつぴんの同級生の顔を見かけるけれど、同じクラスの子でも原形が全くわからないほどに変身している子ばかり。魔法よりこっちの方がよっぽどミラクルだよ！

そして待ちに待った長期休暇！ 私は実家に戻らずに、まっすぐ冒険者ギルドにCランク冒険者

アスカとして出向き、Bランク昇級のための依頼を受ける事にした。

「アスカちゃん、やつと受けてもらえるのね。待ってたよお」

あれ？ Bランクって私が得しても、キャサリンさんが喜ぶような事って特段ないはずだよな？

この長期休暇の期間を利用して、隣の帝国までの護衛依頼をこなし、Bランクへの昇格条件を満たした。

この昇級試験は……試験を受ける冒険者の覚悟を見るために、殺人もいとわない状況下に作為的に立たせられる。

試験内容は、ギルドの指定したルートを通つて物品を運ぶというものだ。

指定されたルートには、盗賊団が存在している。

さらに冒険者がすごく価値のある商品を輸送中であるという情報が意図的に漏らされていて、どうぞ襲つてくださいと言わんばかりなんだよね。

もちろん、陰で高ランクパーティが様子を窺っていて、受験者だけで切り抜けるのは無理だと思えば助けに入ってくれるようにはなつていたらしいけど。

試験を受けるメンバーはそんな事を知らない。

元聖女アスカ・キサラギではないが、Cランク冒険者として登録しているので水魔法だけは遠慮なく使える。

襲つてきた方々は綺麗に退治して差し上げた。

あまりにも平然とやつてしまったから、一緒にいた仲間からはちよつと引かれちゃったけどね。

そんなこんなで、私は無事にBランク冒険者となった。

キャサリンさんが私がBランク冒険者になるのを喜んだ理由は、街に災厄をもたらす魔物が現れた時、呼び出しに応じる義務が生じるからだって。

以前の私なら、教会住まいで泊まりがけの依頼なんて受けられなかったけど、今の私なら時間は自由になるから問題ない。

Aランク以上に上りたいなら、複数人で行うレイドと呼ばれる大規模討伐で目立つ活躍をして推薦される事が必要なんだって。

あんまり目立ちたくはないな。

学院生活は十四歳までだから、年が明けるとすぐに終わりを迎えてしまう。

最近、私と同じクラスのマリアンヌという子がやたらなれなく話しかけて来る。

「ねえ、アスカって見た目そんなに地味なのに、王太子殿下の婚約者なんでしょ？ 後学のために聞かせてよ。王太子殿下ってどんな事に興味を持ってて、どんな服装が好きなの？」

「えーとね、フリオニール様が好きなのは、派手派手でエロエロオーラが全開な女性だと思うよ？」

そこで尻軽をカミングアウトされても困るんだけどな。

まあ、まるっきり嘘ではないしね。

ちなみにイスメラルダは第二夫人として嫁ぐ予定だったんだけど、結界の間の事件後、婚約は解

消されたみたい。

イスメラルダは元々公爵家だし、嫌な場所に無理に行く必要もないからね！ 羨ましいなあ。



ある日の夜更けの事だった。

Bランク冒険者になると渡される、冒険者ギルドからの連絡を伝える念話装置に連絡が入った。

『レイド案件発生。至急集合されたし』

私は呼び出しに応じ、すぐに冒険者の姿になってギルドへ転移で移動した。

すでに五十名ほどの冒険者が集まっていた。

「お、売り出し中のアスカ嬢ちゃんも参戦かい？ 間近で見るのは初めてだが期待してるぞ！」

「私なんて大して役に立たないですから。先輩方の戦いを勉強させていただきますね」

そんな受け答えをしていると、ギルドマスターが深刻な表情で入って来た。

「みんな夜分に召集かけてしまつてスマンな。今回の対象はちつとばかり手強い。はつきり言つて

このメンバーでも無理かもしれないレベルだ」

冒険者たちからため息が漏れた。

「それでも招集をかけたって事は、緊急を要するんだろ？ 構わないからサッサと言えよ」

「この王都から北へ三キロメートルしか離れていない場所にエンシェントドラゴンゾンビが現れた。

危険度はSSS、災厄級だ。現在王都に向かってゆつくりと近づいている。恐らくこの王都の結界ですら一時間も持たんだろう。すでに王宮には連絡をして、王都民の避難誘導を要請してある。Cランク以下の冒険者に関しても、安全な場所への避難を援護するために、ギルド職員総出で連絡を急いでいる」

結構衝撃的な案件だよな。

さあどうするのか？ Bランク冒険者アスカとしては先輩方のお手並み拝見といきたいけど、果たしてそれで何とかなるんだろうか……

万が一の事を考えて、究極神聖魔法陣の札を五枚ほど用意して、重ねがけで発動できるようにしておこう。

ギルドマスターが話を続ける。

「今回の作戦の全体指揮は、ギルノア王国の英雄であり、大陸で唯一のZランク冒険者、ガイアスに頼む。ガイアスのパーティメンバーであるX級ランクの剣聖ブリック、賢者パトリオット、大魔導士ソニアの四人の指示に従って王都を守ってくれ」

「『「おおー！』』』」

へえ、Zランクって居たんだねえ。どれだけすごい実力なんだろう？

でも、あのガイアスさんって仮面を付けているけど、どこかで会った気がする。どこだったかなあ？

王都の聖教会でもイスメラルダをはじめとして、聖職者が総出で結界の張り直しのために控えて

いる。

元聖女である現王妃も教会で控えているそうだ。

招集されたBランク以上の冒険者が街の外で待ち構える中を、骨だけの巨大なドラゴンがゆつたりと飛んで来た。

骨しかないのにどうやって飛んでるんだろう？ かなり不思議だ。

全長は優に百メートルを超えている。

ガイアスの指揮の下、一斉に聖属性と光属性、火属性の三種の攻撃魔法が放たれる。

ガイアスが文字通り空中を走り、伝説の聖剣デュランダルを振りかぶる。

デュランダルはドラゴンゾンジの頭部に吸い込まれたが、敵はそのまま何事もなかったように口を開くと大きなエネルギーの塊を口いっぱいに光らせた。

ガイアスはデュランダルの柄から手を放さず、ドラゴンに振り回されて旗のように揺らめいている。

頭部にガイアスが居る状態では、魔法部隊の追加攻撃もできない。

万事休す？ かな。

次の瞬間、口を広げたドラゴンゾンジからエネルギーの塊が勢い良く放たれ、一撃で王都の結界は消し飛んだ。

ドラゴンゾンジが王都のど真ん中、王城前の広場に着陸し、ゆつくりと歩き始めた。

あの方向は、教会か……